

47 『日本杏林要覧』(明治四二年刊)に

掲載された九州八県下の医師・歯科

医師人名

樋口輝雄

明治四二年に刊行された工藤鉄男編『日本杏林要覧』(以下「要覧」)の記載内容を資として、演者はこれまでに第九七回本学会総会(札幌)で奉職履歴医について、第一〇三回本学会総会・第三〇回日本歯科医史学会総会合同学会(新潟)で、新潟県下の医師・歯科医師について報告した。明治三四年に同じ編者により、『日本東京医事通覧』と題し、東京府下の医師の免状種別、登録年月、生年月、住所等を収載した名簿(医籍録)が出版されたが、八年後に刊行された『要覧』はその全国版であり、明治三四年の内務省令「医籍薬剤師名簿編成並加除訂正規程」により調製された名簿に基づいて編纂されている。同書の前編には医籍が、後編には歯科医籍、口中

科医籍、整骨科医籍、薬剤師籍が掲載され、巻末には約二〇〇頁にわたり「医事薬業衛生ニ関スル諸機関」として、官立・府県立・私立の各医育機関の教員、陸海軍軍医、府県立病院医員、薬種商等が収載されている。

『要覧』では、前編の医籍に掲載された者は凡そ三九一七四名、後編の歯科医籍一〇四〇名、口中科医籍二六名、整骨科医籍七九名で、前報でも誌した如く、同書では道府県別、市郡区毎に姓名イロハ順で掲載され、氏名の下には免状取得事由、生年月、住所等が記載されている。人名については重複があると思われるが、掲載人数のみ集計すると、九州の各県別では、医籍は福岡一六二三、大分八三八、長崎九四八、佐賀六六九、熊本一二〇九、宮崎四五〇、鹿児島一〇七二、沖縄一六一で計六九七〇名、歯科医籍は、福岡三〇、大分一八、長崎二〇、佐賀一一、熊本一八、宮崎二、鹿児島一で計一一〇名であった。また、口中科医籍に、金子猪之吉、佐々木清四郎、湯浅休林(以上福岡)、松添宝一(長崎)の四名、整骨科医籍に、小川才造、吉田喜仙、菊池逢吉、木元元齋(以上福岡)、副島虎之助(佐賀)の名があり、これら

を集計すると、九州地方の八県下では七〇八九名の氏名が掲載されていた。

現在までに、同書前編の医籍に掲載された者について、福岡と沖縄の名簿を作製し、免状種別や族籍等を集計した。免状種別(取得事由)を卒業(『要覧』では、博士・学士・得業士、等と記載)、試験、履歴、従来開業、限地開業に分類すると、福岡では一六二三名のうち、不明(未記載)一三、卒業五四五、試験五二五、履歴一九、従来五一六、限地五で、沖縄は一六一名のうち、不明七、卒業二一、試験八六、履歴一、従来三八、限地八であった。また、『明治三九年衛生局年報』掲載の第七五表「医師種類地方別(三九年末日現在)」を対照資料とすると、全国の医師三五八五〇名中、卒業九二五〇、試験一二三三四、履歴七三九、従来一三一七七、限地三七〇であり、従来開業医(明治一六年までは地方庁仮免許)と限地開業医が全体に占める比率は三七・八パーセントであった。同表を基にした従来ならびに限地開業医の比率は、九州地方では、大分五〇・一、熊本四八・二、宮崎六一・四、鹿児島五八・〇パーセントと四県が全国平

均を大きく上回っていた。

そして、福岡県の欄で族籍が記載されている一六六〇名のうち、福岡を本籍とする者一二八二、他府県三六二、不明一六で、二二パーセントが福岡県以外を本籍とし、沖縄では一六・九パーセントが沖縄県以外を本籍としている。

なお、鹿児島県の場合には同県を本籍とする者一〇一六名のうち士族は八四二名で、全体の八二・九パーセントとなる。士族・平民など各人の族籍については個人情報にも関わる問題であるが、旧幕以来の士族層だったのか、あるいは明治以降の医師に対する身分付与なのか、あるいは各県での行政処分や実情について調査研究する上で重要な資料になると考える。これら、『日本杏林要覧』等の公刊された資料を基に、九州地方の医師・歯科医師の動態ならびに分布について報告したい。

(日本歯科大学新潟歯学部医の博物館)